

核開発に反対する会

2011.6 ニュース No. 40

〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-2-13-502号室 Tel. 03-3261-1128(午前中)

郵便振替 口座名:核開発に反対する会 口座番号:00160-3-615391

A. ニュース購読費(月刊ニュース12号分) 4000円

B. 維持会費(月刊ニュース12号分+資料等)10000円

HP <http://kakukaihatsu-hantai.jp> 連絡先Eメール mail@kakukaihatsu-hantai.jp

福島原発事故

なんでも「水素爆発」というオソマツ

核開発に反対する会 槌田敦

東日本地震(2011.3.11)から3カ月、3つの原子炉と4つの使用済み燃料プールから、放射能がまだ漏れ出している。スリーマイル島原発は16時間、チェルノブイリ原発は6日間で放射能の放出は止まった。福島では見通しもたっていない。

この違いは、地震や津波のせいではない。日本の原子力の貧困に原因がある。正常時の原子炉の運転はできたかも知れない。しかし、事故になった途端、日本の原子力村はうろたえるばかりで、事故の理解も、今後の方針も、何もかも目茶苦茶である。

爆発は4回あった。原子力村の人達は、これをすべて「水素爆発」と言っている。ふたつはそうのように言ってもよい。3月12日の1号機の爆発と3月15日の4号機の爆発である。いずれも発生した水蒸気による白煙が原子炉建屋で発生し、上部のスレートの壁は吹き飛んだ。

しかし、3月14日の3号機の爆発と3月15日の2号機の爆発は様子が違う。3号機の爆発は黒煙が空高く昇った。爆発

源は使用済み燃料プールである。2号機の爆発は格納容器の下部である。このような低いところに水素が溜まって、爆発することはない。

3号機の爆発は核爆発、2号機の爆発は圧力高による格納容器の破裂と考えられる。このふたつが3月14日と15日に大量の放射能を放出し、長野県、静岡県を含む東日本に放射能をばらまくことになった。

そこで、原子力安全委員会と原子力安全・保安院に質問書を送った。以下、その全文である。

目次

なんでも水素爆発.....	1
日本の電力産業に資本主義を.....	4
もんじゅお粗末事故の困難な後始末.....	5
もんじゅは相変わらず危険です.....	6
「もんじゅ」炉内中継装置引抜き工事は即時に中止せよ.....	7
もんじゅニュース.....	9
低線量内部被曝の脅威.....	10
事務局日誌.....	11

【安全委と保安院への手紙】

原子力安全委員長 斑目春樹様

2011.6.11

(FAX 03-3581-9835)

原子力安全・保安院院長 寺坂信昭様

(FAX 03-3580-8434)

3月16日に保安院あてに最初の提案をしてから、安全委と保安院に何度も提案をしましたが、何の返事もいただいてはおりません。5月30日のFAXでは、日本国民からの提案は無視して、同じ内容でもアメリカの提案ならば受け入れるのかとイヤミを書きましたが、このFAXも無視されました。

日本の原子力は、原子力村の住人だけで閉じていることの批判があり、最近では福島事故の反省とかということで、中間派を取り込んで原子力村住民の新しい仲間になっているようですが、反対派に対しては完全に無視するという態度は変わらないようです。これではまた事故を繰り返すことになります。

そこで、今回から提案という形式は止めまして、質問という形にしますので、安全委、保安院としてそれぞれ回答をお願いします。

以下の質問は、6月13日、衆議院でおこなわれる院内集会でもする予定です。

【1号機の事故経過】

福島第一1号機の制御失敗について質問します。

この事故では地震(11日14時46分)から同日夜半まで9時間のもっとも大切なデータが電源喪失で記録されていない、というとてもない事態ですが、その反省が安全委にも保安院にもないようです。それでも原子力を科学技術と言えるのですか。

そこで、この時間でのごことは数値計算に頼る外ないのですが、そのためにも運転員からの聞き取り調査が重要になります。しかし、IAEAへの報告書を読むかぎり、綿密にはなされてはいないようです。これも原子力に対する不信の原因ですが、今後の聞き取り調査を厳密に行うことを予定していますか。

この1号機には、すべての電源を失っても、炉心を冷却できる非常用復水器がついています。これは、圧力容器→蒸気→復水器→水→圧力容器という水の循環により炉心を冷やすもので、ポンプはついていませんから電源は不要です。これは水の重さで循環させるというすばらしい装置で、3つの弁の開け閉め操作だけで炉心を冷却できるという優れ者です。

ところが、この非常用復水器の扱いに慣れていないのか、運転員は非常用復水器で炉心を冷やすことができず、短時間で燃料崩壊に進みました。この非常用復水器の取り扱いの失敗の原因は何と考えますか。それが記述されていません。

たとえば、復水器の上部に溜まった水素ガスを抜き取って、蒸気を復水器に届ける必要があったのに、運転員はその操作をせず、蒸気の凝縮に失敗したと考えていますが、いかがですか。

さらに付け加えれば、この水素ガスを抜き取って、建屋の外に捨てていれば、1号機建屋の爆発はなかったと考えていますが、いかがですか。

【2号機の事故経過】

福島第一2号機の制御失敗について質問します。

この原子炉は14日午前まで水位を保っていたのですが、正午頃から水位が下がります。その原因は何と考えますか。

夕刻、逃し安全弁を開放し、給水しますが、その直後から原子炉圧力は激しく変動します。その原因は、赤熱した燃料が水と触れて次々と崩壊して落下し、その時水蒸気爆発が繰り返されたと考えますが、いかがですか。

この何度も圧力が変化することに耐えられず、圧力容器下部構造が緩み、15日早朝、圧力容器と格納容器の圧力は同じになり、その結果、高圧により格納容器が破裂することになります。爆発音というのはこの破裂ではありませんか。

安全委も保安院もこの爆発音を水素爆発としています。格納容器の外側ならばその下部に水素が溜まることはなく、また格納容器の中ならば酸素がなく、いずれにしても水素爆発とは考えられないのですが、いかがですか。

【3号機の事故経過】

福島第一3号機燃料プールの制御失敗について質問します。

安全委も保安院もこの爆発を水素爆発としています。また、これを水素爆轟とする説もありますが、作業場やプールのような低い所に水素が溜まることはありません。低い所に水素が溜まるとすればその理由をどのように考えますか。

この爆発の煙は黒く、垂直に高く昇りましたが、この現象は1号機や4号機の水素爆発とは様子が違い、別の機構と考えべきではないでしょうか。いかがですか。

もっとも注目すべき事実は、大量の高放射能のがれきを撒き散らしたことです。それは、核爆発として説明する以外には、説明がつかないのではありませんか。

使用済み燃料が空焚きになり、酸化ウランは崩れてプールの底に積もる。底には水があるので冷却が進み、燃料が十分に水浸しになったところで、臨界から核爆発に移行し、核燃料が飛び散って臨界は終了したと考えています。いかがですか。

このように考える時、中性子は観測されたのでしょうか。モニタリングポストは機能していないので、モニタリングカーでの観測ということになりますが、この記録によれば、この爆発の付近の時刻だけ、通常の表記方法0.0001 μ Sv/h以内を使わず、0 μ Sv/hとなっています。うさん臭いのです。

ストロンチウムが遠方で高濃度なのに、敷地内では低濃度というのも解せません。テルルにしても同様です。また、高放射能のがれきの放射能分析がないのも解せません。いずれも、核爆発であることを隠すためと考えられます。いかがですか。

これまでのFAXでの提案の内、海水注入中止を採用した経過を説明してください。

また、液体空気による格納容器の外からの冷却(水の凍結による沈静化)、鉛粒投入による使用済み燃料の臨界防止と固定化、生コン注入による格納容器の支持と汚染流出の阻止、などの提案を、提案者に説明させることなく無視した理由を説明してください。

槌田敦(元理化学研究所研究員、前名城大学教授)

日本の電力産業に資本主義を

原田裕史(核開発に反対する会)

原発事故時の損害賠償に関して「原子力損害の賠償に関する法律」というのがある。特徴は「無過失責任」「無限責任」「責任の集中」となっている。通常の損害賠償と異なり、過失が無くとも賠償の責任があり、上限もない。「責任の集中」はすべての責任を事業者(今回の場合東電)が負うということである。

福島第一原発事故の損害賠償は 20 兆円にも上るといふ試算もあり、資産売却や人件費圧縮を行ったとしても、東京電力の債務超過となり会社更生法適用が順当だろう。

会社更生法を適用した場合、経営者はくびになり、株主は損をする。銀行などの債権も放棄され出資者の責任が問われることになる。出資者が経営者の責任を問う裁判も行われるだろう。一連の過程により責任を問うことが資本主義社会の原則である。そうして責任を問うことで慎重な経営を促すのである。

一部には東電をつぶすと電力供給が滞るといふが、逆である。日本航空のように会社更生法を適用しても事業は続けることができる。あるいは東京電力をつぶし、資産を新しい電力会社に移せば新電力会社はなんの縛りもなしに電力事業を行うことができる。真面目にやれば大変儲かる産業なので参入希望者は多いだろう。また技術者などはそのまま再雇用すれば良いし、日本の電力安定供給を支えているのは無数の下請け業者なので心配は不要である。

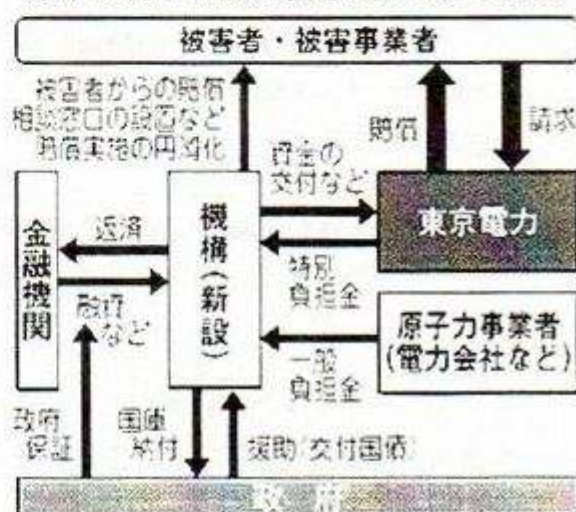
逆に東電を温存すれば東電は賠償に縛

られ経営は困難になる。設備投資も滞り、電力供給に支障が出ないようにするだけで大変である。

東電がつぶれたら被害者への補償が滞るといふ人もいるが、東電をつぶした場合は国策として原発を推進してきた国が責任をとればよい。原賠法では政府の措置は事業者が免責のときに限る、というような些末なことを問題にする人もいるだろうが、法が無ければ作ればよい。当事者(株主・銀行)の責任を十分問わずに他の電力会社などに負担を強いる「原子力損害賠償支援機構法案」よりは根拠が順当である。

税の投入には反対の人もいるだろうが、税を投入しない場合は電力料金が上乗せされるだけなので大した違いはない。東電温存は、本来損をすべき株主・銀行が損を免れる分、国民負担は増える仕組みである。

原子力損害賠償支援機構法案の概要



(東京新聞 HP より)

「もんじゅ」お粗末事故の困難な後始末

中継装置引き抜き作業始まる

中嶋哲演（明通寺）

「もんじゅ」に限らず、若狭の他の原発のトラブルや事故の度に、複雑な構造物・機器の実際を否応なく知らされてきた。お粗末な原因で生じた「もんじゅ」の厄介な事故の後始末に、どんな苦闘が強いられているかが、以下の報道からもうかがえよう。

「原子炉容器内に落下した炉内中継装置の引き抜きに向け、装置回収に障害となる炉上部の大型機器の撤去を始めた。中略

この日は、炉上部にある大型機器として最初の撤去で、報道陣に公開された。冷却材のナトリウムが空気に触れないよう原子炉容器内に充てんされているアルゴンガスを隔離するため、上ぶたの開口部をふさぐ『燃料出入孔ドアバルブ』と呼ばれる重さ約22トンの大型器に、メーカーの作業員ら23人がビニール製の覆いを取り付けた。作業員は、クレーンに設置した新装置の荷重計を見ながら、慎重に約4メートルつり上げ、炉上部に仮置きした。中略

今後、ドアバルブと同容器上の上ぶたをつなぐ案内筒（重さ約46トン、長さ約3.5メートル、直径約1.9メートル）を取り外す。後略

（5月31日『福井新聞』より）

写真や図解なくしてイメージしにくい現場の作業内容だろう。関心のある方は、原子力機構のHPには図解も付されているようだから、確認していただきたい。

上記と同じ5月30日には、敦賀市の国際原子力情報・研究センターで、「もんじゅ」の安全上の課題を検証する「シビアアクシデント（過酷事故）対応検討委員会」の初会合が開かれた。同委員会は、リスクマネジメントや機械工学、原子炉基礎工学が専門の各大学院教授など5人（片岡勲、宇根崎博信、越塚誠一、服部修次、野口和彦の各氏）で構成されている。第2回はまだ開かれていないが、どこまで厳正に批判や検討がおこなわれるのだろうか。「検討するスケジュールは設けていない。十分安全確認はできていると思っているが、第三者の眼で再確認してもらう」と、文科省の森山義範審議官。

6月16日、敦賀保安検査官事務所の3人の検査官が、「福島事故のようなシビアアクシデントへの対応を厳格に確認する」ために、「もんじゅ」へ立ち入り検査した。

（6月17日『福井新聞』より）

あれこれの弥縫策やそのための浪費は、地元住民としてはもうけっこうである。

千数百トンのナトリウムが循環し、蛇行する配管のジャングルなどの舞台裏を、訴訟原告団の一人として現場検証したことのある私は、1.4トンものプルトニウムを含み、シビアアクシデント時は暴走・爆発し易い炉心の「もんじゅ」を、一日も早く廃炉にしたいと切実に願っているにだが。

取り繕い策より廃炉にせよ！

もんじゅは相変わらず危険です。

福井県 石地 優

収束が見えない福島原発事故、浜岡原発が停止したことにより福井の原発の運転を強要する声が強まるのが懸念されます。浜岡原発だけが危ないのではありません。敦賀も美浜も大飯も高浜も安全は保証されていません。いうまでもなくもんじゅも。西川福井県知事は今のところ、停止した原発の運転再開は認めていません。

5月10日、原子力機構は外部有識者による検討委員会の第3回会合を開き落下した炉内中継装置の引き抜きについて問題なしと作業開始を認めました。原子力機構は引き抜き作業の準備を進めています。今年2月頃から東芝工場で装置回収に使う器具を製作していて、現在装置の模型を使い確認しています。国の了解、福井県・敦賀市の了解も必要となる為工程が見えていない

が6月には引き抜きたいようです。

先日もと原子力プラント設計技術者の後藤政志さんのお話を聞く機会がありました。後藤さんは不可逆的な（元に戻らない）事例として、メキシコ湾海底油田事故、今回の福島事故、そして「もんじゅ」を挙げられました。もんじゅを進めれば手がつけれない状況に陥ることを指摘されたのです。

福井ではもんじゅを不安視する人はたくさんいます。5月15日には若者、親子連れなど福井市で「フクシマとともに5・15パレード」の市内デモが行われました。（参加者約120名）新しい波も起きています。

もんじゅを2度と動かすなを声を大きくすることで福島の被災された人にエールを送りたいと思います。

TOPIC 線量目標値

国が定めた一般公衆の被曝限度は1ミリシーベルト/年ということになっていますが、実はそれより厳しい基準があります。1975年に原子力委員会の定めた「発電用軽水型原子炉施設周辺の線量目標値に関する指針」にある「線量目標値」50マイクロシーベルト/年です。米国に追従する形で、「as low as reasonably achievable」（アラウの原則）の考え方に基つき策定されました。

「努力目標」とされていますが、数値が示されているため、事実上の規制であり、国内の発電所は、設計上は一般公衆の追加被曝が50マイクロシーベルト/年を超えないように運営されているハズです。今回の事故後の処理でも50マイクロシーベルト/年を超える場合は、何らかの措置を講じるべきでしょう。

「もんじゅ」炉内中継装置引き抜き工事は即時に中止せよ

福島第1原発事故で

破たんした原発耐震指針のもとでは危険すぎる

今井孝司(核開発に反対する会)

引き上げ装置の覆いは塩化ビニール

「もんじゅ」で、去年8月に落下した3.3トンの炉内中継装置の引き抜き工事が6月中旬にも行われる予定である。当然ながら、この工事にともなう引き抜くための器具の設計、工事の仕方等は3月11日の福島第1原発事故のものである。

福井新聞の記事(2011年5月10日ネット版)によると、原子力研究開発機構は、福島第一原発事故を受けて、今回の工事では、「作業中に地震が起きた場合は中断し、回収器具などは安全な場所に置くことやクレーンに揺れ止めを行うとした。」とある。同記事によると、引き上げ装置を蛇腹のようなもので覆い、ナトリウムと空気が接触しないように充てんされているアルゴンガスを隔離するために、塩化ビニール製の筒状の覆いを使用するという。塩化ビニールという可燃物で覆いをするというのは、何かの火花等での燃焼のことを心配するなら、あまりにも、安直な対応なのではないか。

総重量 11 トンもの鉄塊を持ち上げる

産経ニュース(2011年5月24日ネット版)によると、「炉内中継装置と原子炉容器のふたの穴に設置した「スリーブ」という部品を一体で引き抜く計画。総重量は約

11トンあり、落下防止策を確実に実施するとしている。」とある。新潟県中越沖地震というたかだかマグニチュード6.8という中程度の地震の大きさと、柏崎刈羽原発のクレーンが破損してしまったことがある。引き上げている最中に、M6.8程度の地震が起きたなら、クレーンもろとも、10数トンの鉄塊が自然落下してしまうという、シビアなケースも十分考えられる。そのあと原子炉がどうなるか、あまり考えたくないが。シビアアクシデントのケースとして、考えているのだろうか。もし考えていないなら、即刻、工事はやめてもらいたい。

引き抜き時に地震が起きたらどうなる

また福井新聞(2011年5月23日ネット版)によると、実際の引き抜きの作業時間は10数時間だという。この間に地震が起きたらどうなるか。不活性のアルゴンガスで充てんされているとはいえ、空気に触れると発火する危険物ナトリウムが相手である。吊り上げ装置をつつむジャバラの堅牢さはわからないが、地震でジャバラに亀裂が生じ、かつ、それを覆う塩化ビニールの覆いが裂けてもしたらどうなるだろう。

ナトリウム蒸気が空気と触れ、爆発的に炎上する。当然塩化ビニールは燃え尽きるだろう。覆っている蛇腹の耐火性はわからないが、地震による電源喪失で、安全装置

（消火装置？）が作動しなかったら、炉心のナトリウムが無くなるまで炎上し続けるのだらう。福島第1原発でおきたような、熱せられた燃料棒の被覆管が水蒸気と反応し、水素爆発まで進展してしまうこともありうるだろう。

耐震審査指針は破たんした

福島第1原発事故で破たんした耐震審査指針の問題がまだなにも解消されていない。産総研の研究チームの岡村行信委員が2009年の審議会の席上、今回の地震に匹敵する規模の津波が発生した貞観地震の存在を、証拠をあげてを指摘しながらも、黙殺してしまうという、ひどいものだ。また、その他の指針の致命的な問題点が今回の福島原発事故で明らかになった以上、全原発を止めて、耐震設計を見直す必要がある。このような破たんした耐震審査指針の元で、工事を強引に進めていくのは大変危険な行為だ。

「もんじゅ」も津波で冠水の可能性はある

今回の地震（2011年東北地方太平洋沖地震）では、岩手県宮古市田老で、津波が標高37.9mまで達している。「もんじゅ」の敷地の高さは21m、想定する津波の高さは5.2mである。防潮堤の高さは6.4メートル。田老と同等の津波がきたら防潮堤を乗り越え、福島原発事故と同様なことが起き得るであろう。今回の地震では、地盤が沈下し、相対的に津波の高さが高くなることもはっきりした。今回の地震で、多くの地震・津波の専門家たちが、驚愕していた。地震、津波の仕組みはまだまだわからない

ことだらけであるということだ。そして、津波地震という、マグニチュードが小さくとも、大きな津波が生じるという、まだ十分に解明されていないタイプの地震もある。「もんじゅ」敷地内に届くような津波は絶対あり得ないとは言えないのである。

よって「もんじゅ」敷地内への津波が侵入を想定することは必要である。しかし、もんじゅは他の原発とちがい、海水と最悪な相性の液体ナトリウムを冷却材に使用している。地震により建物が破損、もしくは少しのひび割れが発生しただけで、海水が施設内に侵入する。ナトリウムを使うため、薄くせざるを得ないペラペラの配管が破断する。その侵入した水が接触し炎上が始まる。地震による全電源装置喪失により、消火装置が働かない場合は、配管内の全てのナトリウムが燃え尽きるまで、燃え続けるだろう。

「もんじゅ」を廃炉に

今回の引き上げ工事は、いかに危険であることが説明したが、特に引き抜き作業をしている十数時間で危険度が最も高まる。この時間だけでも、周辺10キロ程度の人を避難させることも必要なのではないかと思う。こういった地震の対策が不十分な中での工事实行は許されない。「もんじゅ」は後継機のモデルともならず、電力も生み出さない無用のもの（核兵器作成を意図する人々に有用かもしれないが）であるから、迷うことなく、直ちに廃炉にしてもらいたい。

（2011年6月10日記）

炉内中継装置の引き上げ工事が開始された今日この頃ですが、気になる記事があったので紹介します。

.....

もんじゅ非常用発電機損傷 点検時に過大圧力、強度不足も

(2011年6月4日午前7時18分) 福井新聞

日本原子力研究開発機構は3日、高速増殖炉「もんじゅ」(福井県敦賀市)の非常用ディーゼル発電機のシリンダー部が損傷したトラブルで、原因は点検でシリンダーのふたを取り外す際に過大な圧力をかけたためと発表した。損傷したシリンダーは、製造時に鉛が混入して強度不足だったことも分かった。

経済産業省原子力安全・保安院によると、鉛が混入しているシリンダーは、1987年2月から89年5月までの間に製造されている。県内では、もんじゅのほか関西電力美浜原発1号機で使用。北陸電力志賀原発1号機などでも使われており、保安院は3日、健全性の確認や交換などの措置を取り報告するよう求めた。

もんじゅでの同発電機のトラブルは昨年12月、分解点検を終えて最終段階の発電試験を行った際に起きた。12本あるシリンダーの1本

で、ピストンの外筒に13カ所のひび割れを確認した。点検をしたメーカーの作業員への聞き取りなどの結果、シリンダーのふたを油圧ジャッキで取り外す際、油圧計を付けずに作業をしていたと判明。過大な圧力をかけたため破損に至ったと推定した。作業要領書に油圧計の取り付けは明記されていなかった。

また、調査の過程で鉄製のシリンダーの強度不足が確認された。製造時に鉛成分が混入し、基準の6割程度の強度しかなかった。ただ適切な油圧で作業すれば、強度不足のシリンダーでも、ひび割れは起きないという。

原子力機構は6月中に、当該発電機のシリンダーをすべて新品に交換する。作業要領書に油圧計設置を明記。ほかの2台のシリンダー計24本は強度を測定していく。

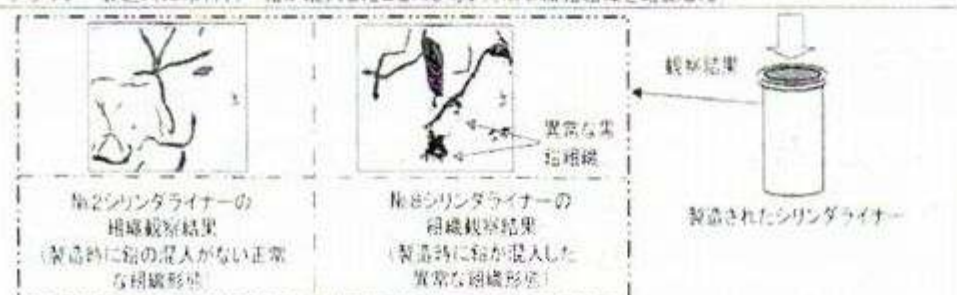
一方、関電は美浜1号機に2台ある同発電機的全シリンダーを調査。そのうち、基準を下回った2本をすでに新品に交換した。北電も志賀1号機で点検を行い、自主基準を若干下回った16本を交換することにした。

同発電機は外部電源を失った場合に緊急炉心冷却装置(ECCS)などに電力供給する重要な設備。東京電力福島第1原発事故では津波で壊れ、炉心冷却機能を失う事態になった。

<http://www.fukuishimbun.co.jp/localnews/nuclearpowermonjuresume/28468.html>

2. シリンダライナーの組織観察結果

調査の過程で一部のシリンダライナーの引張り強さの低下が確認されたため、組織観察を行った結果、シリンダライナー製造時に原材料へ鉛が混入したことによる、異常な黒鉛組織を確認した。



図：原子力機構HP

<http://www.jaea.go.jp/O4/turuga/jturuga/press/2011/06/p110603.pdf>

本の紹介 **低線量内部被曝の脅威**

—原子炉周辺の健康破壊と疫学的立証の記録 [単行本]

ジェイ・マーティン・グールド (著), Jay Martin Gould (原著), 肥田 舜太郎 (翻訳), 藤藤 紀 (翻訳), 戸田 清 (翻訳), 竹野内 真理 (翻訳)

核開発に反対する会 シゲノ サオリ



現在 3 月 11 日東日本大震災以降から続く福島第一原発事故に寄り放出された放射能汚染による低線量被ばくが問題となっています。しかし、そもそも原発

は事故をおこさずとも、稼働するだけで微量放射性物質を環境に放出しており、それによる隠れた健康被害が進行しつつあるといわれています。

本書は、核開発先進国のアメリカにおける原子炉周辺や、核実験場からの放射性降下物による健康影響(主に乳がん、・・死産、低体重児など)について、膨大なデータと事実を積み上げて紹介しています。

疫学や、数字に疎い一般市民にはグラフと数字で示されたデータをどう読みとるかはやや難しい部分がありますが、その考え方に関して丁寧に説明されています。どのように政府発表の数字が操作され、データが作られるかということについても非常に興味深いです。第6章の1971年にニクソン大統領の指示で国立ガン研究所が原子炉周辺の発がんリスク調査に関する記述がありますが、対照群のとり方がおかしいなど・・詳しくは本書をご覧ください。

乳癌の原子炉周辺調査は100マイル(160km)の距離で行われます。100マイル以内とそうでない区域では100マイル以内に影響があるという数字になる結果が出ているといえます。本書の翻訳者でもある肥田舜太郎氏は自身の著書「内部被ばくの脅威」の中で「日本に52基ある原子力発電所ではどのようなになっているのか調べてみた。ところが、日本全土が原発を中心にして100マイルの円を描くとすっぽり入ってしまい、原発のある県とない県を比較することが出来なかった。」と述べています。事故が起こったら更にこの言葉は重くなります。蛇足ですが、こういった疫学などで対象になる症例は、※3東京大学先端科学技術センターの児玉龍彦氏によれば「症例が特殊だからこそ被ばくとの関係が明らかにできる」ということがある。と述べています。

有意差が出づらいその他の症例も、もちろん被ばくによって誘発されていて、それらが科学の名のもとに切り捨てられても、なお低線量被ばくの影響が無視できない事例がある言う事は言うことか、今後のためにも知っておく必要もあると思います。

※1 内部被ばくの脅威 ちくま新書

肥田舜太郎・鎌仲ひとみ

※2 医学のあゆみVO1・231NO4
2009

http://www.ishiyaku.co.jp/pickup/20110322_info/ayumi_23104_306.pdf

事務局日誌 その27

柳田 真

1. 事務局日誌の筆がなかなか進まない。編集担当の渡辺さん、原田さんに「負担」をかけてしまった。理由は福島原発事故で超多忙もあるが、それ以外にもう一つ、会の活動と福島原発関連活動が混然一体となっていることだ。(そうならざるをえない実情がある)。このため、『核開発に反対する会』の独自行動は最小になり、事務局日誌が書きにくい。

2. 東電福島事故は、かねての私たちの指摘・主張が残念な形で現実到大惨事となってしまった。3ヶ月が経過してもいまだ「収束」の見通しは見えない。むしろ、汚染水(殺人の水)の増大⇒海への投入の危機や地下水への浸透、食品や大地・土地の放射能汚染の拡大など悪い事態が進行しています。人間と全生物への放射能汚染の増大が迫りつつある。今後、長期間の苦しい原発放射能との闘いが続く。もし最悪なら東京も汚染地帯・居住不適地帯になる可能性もありうる(小出裕章『原発のウソ』第1章)覚悟を定めて、長い闘いをやりぬける体制をつくりたい。原発やめようを主張して30年近く努力して来た経過(過去)をもつ私たちだから。希望も見える。3. 11以前には、とても考えられなかった多数の若者や女性たちが「原発いらない、原発やめよう、子どもを守れ」集会、デモに立ち上ってきているから。

3. 東電福島「
の過酷事故を

が、世界でも初めて
日本と世界を震撼

させているので、「もんじゅ」原発の影が薄くなった。決して、『もんじゅ』の本質的な危険が去ったわけでは全くないが、メディアへの登場もごくわずかとなった。

中嶋さん、今井さんの記事にあるように、「もんじゅ」の作業が本格化してきました。私たちは今後も、折を見て、機会をたくみにとらえて、福島原発事故とも関連づけて「もんじゅ」廃止をめざす活動を続けたい。皆で知恵を出し合って。現地と連絡をとりあって。

4. 『核開発に反対する会』メンバーが講師に。論文執筆に大忙し。『たんぽぽ舎』と『核開発に反対する会』によせられた講演依頼は90、執筆依頼は40余り、

榎田敦さん——10 ちかくの講演会へ出かけている。

原田裕史さん——若さを生かして一番たくさん講演(遠隔地も含めて)へでかけている。約30

山崎久隆——20 余の講演会へ。小論文執筆も一番多い。(APC、『あごら』、『思想運動』ほか)

坂東喜久恵さん——静岡、浜松での講演会など

柳田 真——10 近くの講演と7つ程の文章執筆(『学ぶ』『市民の意見 30』『思想運動』『反安保実』他)

5. 希望の芽を大きく育てる——『核開発に反対する会』と『たんぽぽ舎』の重点目標

2011年3.11の「世紀の大惨事」を少しでも「希望の年」へ変えられるとしたら、

それは3.11以降、多くの市民が立ち上がり、「2011年は、日本が原発廃止へ踏み出す歴史的な年（の1年目）にみんなの努力でなれた」ということではないでしょうか。その実現をめざします。従来からの原発反対勢力（おもに芝公園集会、実数 2000～5000）と、『高円寺 素人の乱』に象徴される運動（高円寺——渋谷——新宿、約1万人余）、その他にもいくつかの動きが起きています。これらをつなぐ「のりの役目」をめざしつつ近い将来、5万人～10万人、そしてドイツの25万人デモ（人口は8000万人）をめざす。ドイツ、イタリアに続いて、日本も原発廃止をめざす。「21世紀の原発廃止 独・伊・日」をめざしたい。

6.「原発さようなら」の早期実現をめざすスローガン（案）——みなさんの意見、知恵を寄せて下さい。

イ. 事故直後のスローガン:

- 原発予算 4300 億円を中止して、東北

私たちは日本が汚染国家になったことを認めるしかない。日本人はこれから国際社会のなかで簡単には受け入れてもらえないかもしれない。しかしジタバタしてもはじまらない。その中で一番いい方法を見つけるしかない。高レベルの放射線の中で生活する術を考えねばならない。

ISBN978-4-7505-1110-8
C0036 ¥1500E

定価：本体1500円＋税
並行書房

の救援・復興に全額振りかえよ！

- 稼働中の全原発を即時停止せよ——地震・余震・津波が心配だ。第2のフクシマをおこすな！
- こどもを放射能から守れ！——20 ミリシーベルトの押し付け反対、撤回せよ！」

ロ.6月下旬現在

- 福島第一収束のため、日本のもてる総力を福島第一へ投入せよ！
- 汚染水（放射能——死の水）を海へ流すな——巨大タンカーを早く持って来い！
- 汚染水（放射能——死の水）の地下水浸透を防げ——防壁を急いでつくれ！
- 海江田万里経産大臣の原発再開容認発言に反対、原発を動かすな！
- 地震・余震が心配だ。第2のフクシマを発生させるな！

原子力に未来はなかった
樋田敦

原子力に 未来はなかった

樋田敦
監修書

スリーマイル島16時間、
チェルノブイリ6日間、
いまだ「福島」を止められない——
日本の原発、
ほんとうにこのままで、いいですか？

安全性、高コスト、廃棄物の処理……すべてが未解決のまま、2011年3月11日、私たちは福島を迎えた。70年代から科学者として反原発を唱えてきた著者が、いま福島第一原発の事故について語る。反原発の思想的支柱・名著『石油と原子力に未来はあるか』のリニューアル版

並行書房